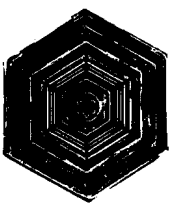
雪姫絵図



高木彬光

東都書房

雪姫絵図

著者の了解により検印廃止

昭和四〇年五月一〇日　第一刷発行
四三〇円

著者　高木彬光
東京都文京区音羽町三ノ一九

発行者　斎藤修一郎
東京都板橋区志村町一ノ一

印刷所　東洋印刷株式会社

発行所　東都書房
東京都文京区音羽町三ノ一九
振替東京七二七三二
電話東京(九四二)一一一一(大代表)

(若林製本)

© 一九六五年　高木彬光

落丁本・乱丁本はおとりかえいたします。

雪姫絵図　目次

六文銭 …… 五
鉄火おんな …… 一六
黒い触手 …… 二七
偵察行 …… 三八
闇の影 …… 四九
花なき女 …… 六〇
使者 …… 七二
脱出 …… 八三
廃寺の怪 …… 九四
血の波瀾 …… 一〇五
謎の糸 …… 一一六
怪盗再来 …… 一二七
後門の狼 …… 一三八
魔薬 …… 一四九

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

姫さばき——一六〇
雪の謎——一七一
女の決意——一八三
渦流——一九四
仇討ながれ——二〇四
第二の芝居——二一五
月と雲——二三六
窮地——二三七
捨て身のわざ——二四八
狂風——二五九
見えざる線——二七〇
急の段——二八一
切支丹やぶれ——二九三

装幀　森下年昭

六文銭

（一）

「すりだ！」
「おのれ！」
突然あがった叫び声に、本堂正面の階段を上ろうとしていた参詣人の人波がどっと崩れた。
三社祭も、もう間近に迫っている初夏のうららかな日和だから、こうして浅草の観世音にお参りに来る善男善女の数も、朝からたいへんな数に上っていたが、それだけに、その隙をねらおうとしている悪人たちも、決してないとはいえない。
いや、彼等にとっては、こういう混雑こそ絶好のかせぎ所であり書き入れ時だといえるだろう。
いま、本堂のすぐ前で、二人の侍に、両方から腕をおさえられた若いやくざっぽい男も、そんな悪党の一人かも知れない。
「やい、やい、何をしやがるんでえ」
青くなりながら、この男は反抗した。
「何をするとはこっちのせりふだ」
「貴様は、我等のお守りする高貴のお方の懐中をねらったであろう」
「盗人たけだけしいとは汝のことだ」
「さあ、すりとった物をすなおに返せばよし。さもなくば、ただでおかないぞ」
二人の侍は左右から交互にきめつけた。
「そ、そんなことをいわれても、こっちには何のおぼえもねえ」
「何をいうかァ、では、この腕をへし折ってやろうか？」
左腕を逆にねじあげられて、この男は大きく悲鳴をあげた。
いったんは、逃げ出しそうになった人々も、事がはっきりして来たものだから、江戸っ子らしい野次馬根性を発揮したのか、大きな円陣を作って、この場の成り行きを、瞬きもせずに見つめている。
そのとき、その人波の中から、
「お侍さん、しばらくお待ち下さいな」
と声をかけて、前に出て来た女があった。年は二十二、三というところだろう。櫛巻、白歯、小股の切れ上がった色白の美貌は、ただの素人女とは思えない。
たとえば、女だてらに、あらくれ男たちを顎で使っているようなわかい女侠というような、あだないなせな感じが、顔から全身にみなぎっていた。

「女、お前は何者だ？」
「なぜ、われわれをとめるのだ？」
いきりたっている二人の前に、女はかるく小腰をかがめて、
「わたしはお妙というおてんば女でございます。ちょうどお祭りにやって来まして、いまのいきさつは、この場で見ておりましたが、ここは観音さまの御本尊前、つまらないことでさわぎをおこすのもおそれ多い話でございます。まあ仲裁も時の氏神というような言葉もあることでございますから、お腹だちでもございましょうが、ここはわたくしにおまかせねがえませんでしょうか？」

（二）

「なに、女の出る幕では……」
「待て。まかせろというのはどうするのだ」
お妙は妖艶といいたい笑いを浮かべて、
「たしかに、この人がすったというなら、わたしとしても泣きねいりはございません。ただ、この混雑でございますから、お間違いもないとはいえますまい。御懐中物にしても、落とされたかも知れませんし、また本当にすられたとしても、この人がやったかどうかは別問題でございましょう」
「いや、たしかにこの男がやったのだ」
「おれはそんなこと、おぼえがねえぞ」
お妙はかるく眉をひそめて、
「まあ、おたがいに口でそんなことをいいあってもこれは水かけ論でございましょう。それより証拠をあらためるほうが先じゃございませんか。女ならともかく男なら人前で裸にして見たところで、べつに何でもございますまい」
「うむ、それはいちおうもっともだが……」
「わたしの言葉をお聞き下さって、まことにありがとうございます」
お妙は相手の気合をとって、頭を下げると男の方へ近づいて、その肩をかるくたたき、
「さあ、兄さん、お前さんもここが災難とあきらめて、裸になって見せるんだね。それ以外、身のあかしをたてる方法はありゃあしないよ」
となだめるようにいった。
「わかりやした。さあ、姐さんはむこうへ行っておくんなさい。ひとつひとつ、こっちの千両肌の御開帳をはじめますから」
お妙が笑って、後へ下がるのを待って、男はするすると帯を解き、袷をぱっとぬぎすてた。肉づきのいい色の白い体には、両腕から背中一面に、牡丹と唐獅子が彫ってある。青黒いぼかしが、真白な下帯の色とあざやかな対照を見せて、凄いくらいに粋なのだ。
「さあ、ここにあるのはおれの財布だ。中には一両一分と二朱、ほかにびた銭で百あまり、いったい何をとったとい

うんだ？」

男に逆に啖呵を切られた侍たちは、二人とも逆上ぎみだった。この全身の刺青を見て、ただ者ではなかろうと思ったろうし、証拠がなくては自分たちの負け、えらいことになったと考えたのだろう。

「いや、たしかに其方が……」

「われわれは、ちゃんと、この眼で見とどけたのだが…」

「やいやい、何をいってやんでえ！」

男は怒りを一時に爆発させたように、

「侍と思って、こっちがおとなしくしていたら、さんざんつけ上がりやがって……こうしてこっちが裸になって、それでも証拠が上がらねえんじゃ、無実は誰が見たってはっきりしてるじゃねえか。この姐さんが出て来てくれなきゃ、こっちは腕を折られたかも知れねえ。さあ、この始末はどうしてくれる？」

「お前さん、もうおよしよ」

お妙はそばから眉をひそめていった。

（三）

「おい、唐獅子のお兄さん。ちょっと待った」

あれから、さんざんごてたあげく、酒代一両をまきあげて、奥山のほうへやって来たこの男は、銭塚地蔵の近くで後ろから呼びとめられてふり返った。

声をかけたのは、二十五六の色白下ぶくれ、すらりとした長身の浪人だった。

このあたりをうろついている浪人は、芝居小屋の居候か、やくざの用心棒か、うす汚い恰好の品のわるい人種が多いのに、この男は黒紋付もさっぱりしているし、顔にも体にもどことなく品がある。しかも、その眼は柔和な色のうちにも、厳しい鋭い光をたたえていた。

「何だね。お前は？」

「わしか。わしは真田六之助という浪人だ」

そういえば、紋付の紋も、真田幸村のものといわれる六文銭、ちょっと変わったものだったが、あたりを見まわしながら、近づいて来るなり、耳に口をよせて、

「いまは危いところだったな」

とささやいて来た。

「何だって？」

「いや、人の物をするのに、受け手を用意しておかないという法があるか」

「冗……冗談をいうな。おれはいま、裸になって、身のあかしを……」

「それはあいうぼんくら侍の眼ならごまかせるだろう。ところがこっちの眼は、六文銭の穴とは違うのだ」

六之助はかるくにやりと笑って、

「あそこで飛び出して来たお妙という女、あれもただ者ではなさそうだな。最初からの仲間とは思えないが、仲裁人と見せて、手品みたいな早わざで、お前からすった品物を

うけとったろう。その後でお前が裸になったのでは、なるほどすった品物が出て来るはずはあるまいな」
「何だって！」
みごとに真相をいいあてられて唐獅子の男はよろめいた。それでも、虚勢をはるように、左手をまくりあげ刺青をたつきつけて、
「おい、妙ないいがかりはよしてもらおうぜ。話としちゃ面白いが、ただ、それだけのことじゃあねえか。いったい、何の証拠があって、人を悪党あつかいしやがるんだ」
「強がりはよせ。わしはお前のためを思って、こうして注意しただけだ」
「よけいなお世話だ。そういうおどしで、酒代の一両の中から、いくらかいたぶろうとでもいうのか？」
「そんな下らないまねはせぬ。こう見えてもいまのところ、百両二百両の金には困っておらぬからな」
六之助は笑いながら、懐の紙入れをとり出して開けて見せた。たしかに中には、十枚の小判が山吹色の光をはなっている。
「それじゃあ、どうして？」
「このままで行くとお前の命が危い。そう思って声をかけたのだ」

（四）

「命が危いとはどういうわけで？」
六之助という人物が、何となくうす気味わるくなって来たのか、唐獅子の男は声をひそめてたずねた。
「お前に死相が出ているからだ」
「死相？　冗…冗談じゃねえ。あんまりおどかさねえでおくんなさいな」
「人の生死に冗談はいえない。お前が何といっても、わしの占いはよくあたるのでな。まあ、どこかで飲みながら話そうか。勘定はこっちが払う。死相を除く方法も教えてやろう」
ぽつりぽつりと、一言一句を区切りながら話して来る言葉にはふしぎな力があった。
「ところで、お前の名前は何という？」
「へえ、竹吉――唐獅子の竹と申します」
「竹なら虎のほうが似あいそうだが、まあ、いっしょについて来るがよい」
二人は肩をならべて、奥山のほうへ歩き出した。
「お前は誰か、跡をつけているのに気がつかないか？　いや、後ろを見てはいけないぞ」
六之助は、鋭くだめをおした。
「へえ……でも、どうしてそんなまねを？」
「とうぜん、とられた品物をとり返すためだ。それが死相と関係のあることはお前にもわかるだろう」
「でも、旦那、わっしは品物を持っちゃおりませんぜ。つけるなら姐さんのほうを……」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

「あの二人の侍は、あれから紫の頭巾をかぶった女のところへ行って指図をあおいだな。お前が紙入れか何かをすりとったのは、その女からだろうが、その間にお妙という女は、どこかへ消えてしまった。お前は着物を着るのに手間がかかったから、それで尾行に間にあったわけだ」

「でも旦那……」

「まあ、いいから聞け。お前も悪党仲間の仁義として、あのお妙という女には、いちおうの挨拶をしなければすまないだろう。あの女のほうも、最初から受け手にきまっていたわけではなくても、お前とは、赤の他人でないことは、わしにさえわかったからな。それなら、お前の跡をじーっと追っていさえすれば、かならず女と品物にぶつかることになるだろう」

「畜生！」

竹は低い声でうめいた。

「旦那、これはいいことを教えていただきやした。それじゃあ、どこかでうまく逃げ出してずらかっちまいましょう。御挨拶には、またあらためて出ますから、かんべんなすっておくんなさい」

「いまのところは、それでもよかろうが、それでは死相は消せそうにもないな」

「何ですって？」

「それだけ見事な刺青があれば、むこうもお前を探しやすいだろう。それにただ金だけをとられたというなら、むこうもそれほどこだわりもすまい。これほど執着するからには何か大きな秘密がありそうだな」

（五）

六之助と竹は、間もなく、奥山の芝居小屋のそばにある「三日月」という料理屋の奥座敷へ上がりこんだ。

「旦那、こうして初めておあいして、御馳走になってすみませんねえ」

「酒はいつでも飲んでいる。一人よりは相手のあるほうがうまいしそれにわしは何か変わったこと珍しいことがあると、どうも黙っていられない。たのまれもせぬのに、首をつっこみたくなる悪いくせがあってな」

六之助は笑いながら答えた。

杯を二度三度やりとりしているところへ女中が入って来た。妙にいわくありげな顔で、

「お兄さん、あなたは唐獅子の刺青をしてらっしゃいますか？」

「その刺青がどうしたってんだ？」

「いま、お侍さまがお見えになりまして、奥でそういう刺青をしたお方が飲んでいるはずだが、ぜひお目にかかりたい。決して失礼はしないからとおっしゃるんでございます」

「何だって？」

竹はとたんに眼を白黒させた。

「旦那、真田の旦那、これはいったい……」
「まあ、いちおう会って見るのだな」
六之助は平気な顔で答えたが、女中の姿が見えなくなると、懐から小さな袋をとり出し、中の六枚の銭を畳の上に投げた。
「旦那、それはいったい何のおまじないで？」
「まじないではなく占いだ」
六之助は、銭を集めてしまいながら、
「どうも死相の原因がやって来たらしいな」
「あ、あんまりおどかさねえでおくんなさい」
「おどかすつもりはない。ほんとうのことを申しているだけだ。それを逃れたかったなら、どんな甘い話にものってはならぬぞ。万事わしにまかせると約束するか？」
「へえ、よろしくおねがいいたします」
竹が頭を下げたとき、女中に案内されて、一人の侍が入って来た。さっき、竹をつかまえて裸にした二人の中の一人だが、今度は人がかわったように、入り口近くで手をつくと、
「唐獅子の親分、ただいまは間違いといいながら、たいへん失礼をいたした。拙者は奥野孫兵衛と申すふつつか者、主名は理由があって申せないが、どうぞよろしくお見知りおきを願いたい」
と丁重きわまる挨拶だった。
「いや、そのようにおっしゃられてはいたみいります。さ、さ、どうぞこちらへ」
「このお方は？」
「いや、あっしがいつもお世話になっております、占いの先生で、真田六之助さまで」
「真田どのか？　ちょっと座をはずしてはいただけないか？」
六之助もきりと眼を光らせて、
「この竹さんが、どうしてもというなら、どこへでも消えるが、竹さん、どうするな？」
「どうか、このままここにおいでなすって、お侍さんとのお話は苦手でござんすから」
竹は必死にひきとめた。

（六）

「さようか。それでは真田殿の前でお話いたすが、このことは他言御無用に願いたい」
孫兵衛はやっと覚悟をきめたように、
「ただいま、我々のお守りするお方の御懐中物が紛失した件については、親分にあらぬ疑いをおかけして、たいへん失礼をいたしたが、あの中には、金のほかに、たいへん重要な品物が入っておるので、何とかそれをとり返したい。ついては、それについて、親分のお力を拝借できないかと、実はこういう御相談でまいったのだが」
「でも、あっしはたったいま、裸になって無実のあかしを

たてたばかりですぜ」

「それは重々承知しておる。拙者はなにも親分に罪を着せているわけではない。ただ、お背中の刺青でもわかることながら、親分はいろいろの方面にお顔が広そうだから、こうしてお願いするのだ。中の金子はどうでもよい。ただ紙入れとその中のものを、何とかして買いもどすわけには参るまいかな?」

この侍も、いまではお妙との手品のような大芝居の真相に気づいていることは間違いなかった。しかし、そのことはおさえて表には出さず、こうして下手に出て来るところは、むしろいじらしいくらいだった。

「なるほど、それは御念のいったお話で」

竹も言葉を濁したままうつむいていた。

「われわれとしては、いまさら下手人が誰かというようなことは問題にしたくはない。こちらにしても、油断があり、手落ちがあったのは事実だから……ただ、あの品物を故売商、系図買いの手を通じてでもとりもどせればと思ってな。親分へのお礼は、いちおう十両ということにしていただけないかな?」

「十両?」

唐獅子の竹が、声をふるわせたのも無理はなかった。一口に十両といっても、十両盗めば何の文句もなく死罪である。それを気づかって、被害者のほうでも、とどけを出すときには、十両をちょっとぐらい越えても、九両三分二朱盗まれたと、とられた額を内輪におさえるくらいなのだ。

それだけの金を、いわば泥棒に追い銭のような形で投げ出すというのである。悪党ではあっても江戸っ子なら動揺するのも当然だろう。

「親分へのお礼以外に、たとえば系図買いにはらう代金のようなものは、また何とでも相談にのろう。ただ、我々としては、一刻も早く品物をとり返したい以外に他意はない。いかがかな。この条件を呑んでいただくわけには行くまいか?」

「へえ……ごていねいなお話とは存じますが……真田の旦那、これはいったい、どうしたもんでござんしょう?」

竹は一も二もなく、この話にとびつきたかったらしいが、いまの約束の手前もあり、六之助に助け舟を求めるようにたずねた。

「それでは拙者がかわっておたずねするが、その品物が見つかった場合、どこへおとどけすればいいのかな?」

(七)

「それは拙者がじきじきに……」

「それは無理な話だ。その品物がここにあるとか、この隣の部屋にでもあるというのなら、即刻とりもどすことも出来ようが、これは系図買いの手に入るとさえ保証はできない。すりによっては、紙入れをぬいたような場合、中身の金だけをぬき出し、紙入れはどこへでも捨ててしまう人間

もいるらしい……」

孫兵衛の口からは大きな溜め息がもれた。

「我々としては、そのような事態にはなるまいと確信はしているのだが……」

「それはおっしゃる通りだが、手前としてもすりの親分ではなし、系図買いではなし、大丈夫と保証はできかねる。ただ、その品物を見つけ出すまでには何日かかることだけは第三者にもいえることだ。その品物を見つけ出したとき、どこのお屋敷にとどければいいのか、それをうかがうのは当然だろう」

「うむ……」

孫兵衛は腕を組んで絶句した。やがて仮面をぬぎすてたような激しい語気で、

「ではこちらも注文を変えるとしよう。いまここで十両即金で払おう、が、あのお妙という女の家なり、またはどこで連絡をとれる、それを知らせてはもらえまいか？」

といいながら紙入れをとり出した。

「でも、あっしは何も知らねえんで……」

「そのようなことは信じられぬ。あの女が仲裁と見せて、其方から品物をうけとったことはあの直後に見やぶった。こちらも事をあらだてまいと思えばこそ、このように下手に出たのに、さあ、金がいいのか。刀がいいか」

「へえ……お妙さんは毎晩、浅草三筋町、般若の権次親分のところの賭場へ来ますんで」

六之助がちょっと思案しているうちに、竹はふるえ上がったようにいってしまった。

「般若の権次の賭場なのだな。それ！」

たたきつけるように、十枚の小判を畳の上に投げ出すと、孫兵衛は座を蹴って立ちあがった。挨拶もせずに部屋を出て行く後ろ姿を見送りながら、六之助は、

「お前も馬鹿だな。せっかくこっちが、いい作戦を考え出そうとしていたのに……それだけの刺青をしているからには、もう少し根性がすわっているかと思っていたが」

と呆れたようにいった。

「どうもすみませんが、これ以上旦那に御迷惑をかけてはと存じまして」

「それで、いまの話はほんとうなのか？」

「ほんとうでござんす。ほかでもあったことはありますが、あっしは今夜、姐さんとその賭場でおちあった上、助けてもらった礼をいうつもりでござんした」

六之助はまた黙って眼をとじ、六枚の銭を投げ出した。その散り具合を見たとき、額に深い縦皺をよせて、

「これはいけない。わしを今夜その賭場へつれて行ってくれ。このままにしておくと、お前もあの女も殺される。それだけではなく、えらいさわぎが起こりそうだぞ」

（八）

「おお、そこへ行くのはお妙さんじゃねえか。ちょっと待

ちなよ」

　ちょうどそのころ、雷門から駒形橋のほうへ歩き続けていたお妙は、横の小路から出て来たやくざの貸元風の男に呼びとめられてふり返った。そして、顔いっぱいにこぼれるような笑いを浮かべて、

「まあ、般若の親分さん、これはまたとんだところでお目にかかりましたねえ」

　といいながら、小腰をかがめた。

「これも観音さまのおひきあわせかなあ。お前さんにあいたいあいたいと思っているおれの心が通じたのかも知れないなあ」

「まあ、親分さんといったら御冗談ばっかし、おたくの賭場には、しょっちゅう上がっているじゃありませんか」

「それが、あんな場所じゃ、みんなの手前もあり、お前さんは勝負にあつくなっていると来るから、なかなかおちついて話も出来ねえしな」

　般若の権次は苦笑いして、

「まあ、ここで出あったのも、何かの縁だと覚悟をきめて、ちょっとつきあってもらえねえか。お前さんだって、もともといける口なんだし、一杯ぐらいはいいだろう」

「そりゃあ、こんなすべたでよかったら、お酌の一つぐらいはしないでもありませんけれど、小座敷のさしむかいはごめんですよ。まだ痛くもないおなかを探られたくはございませんからねえ」

「お前さんの男ぎらいにも驚いたぜ」

　権次の苦笑いはひどくなるばかりだった。それでも立ち話よりはよかろうと思ったのか、つれている若い二人に何かささやいて追っぱらうと、

「さあ、そのどじょう屋へ行こうか。追いこみだったら、男と女がさしで飲んでいたって、べつに何といわれることもないだろう」

　といいながら、数間先の店ののれんをくぐった。

　店は割合すいていた。その座敷の一隅に陣どって、酒とさかなをあつらえると、権次はあたりを見まわしながら、声をひそめて、

「ところで、お妙さん、この間からの話の返事を聞かしてもらえねえだろうか？」

　といい出したが、お妙は笑って銚子をとりあげ、権次の杯に酒をつぎながら、

「お話というのは何のことだったっけ？」

　と、すました顔で問い返した。

「とぼけちゃ困るぜ。こっちも男を売る稼業だ。そのおれがこうして七重の膝を八重に折って、女房になってくれねえかとたのんでいるじゃねえか」

「……」

「これが妾にならねえかとか、一時の浮気をしようとかいうような話だったら、冗談半分にあしらわれてもしかたがねえが、こっちは真剣に考えているんだ。そうだなこの真

実を見せるためなら、熊野の護符を飲んでもいいと思うんだが」

（九）

もちろん、人に聞えないように声をひくめているとはいっても、面とむかってこんなことをいわれては、お妙もいくらかきまりが悪くなったのだろう。照れたようにうつむきながら、

「それは、親分さんのお気持は、何ともありがとうございますが、わたくしは、一つの念願を持っている女でございます。その願いがかないますまでは、男を絶つと、神仏に誓ったことでございますし、そのお言葉は最初からなかったことにしていただけませんか」

と、人が変わったようにていねいな口調でいった。

「いや、お妙さん、こっちも男だ。ただ、それだけの口上では、ああ、そうでございますかとは、なかなかひっこみきれねえなあ」

権次も四十がらみの精悍な顔をいっそう緊張させて、

「こっちも前の女房に死なれて二年、一生ひとり暮らそうかとさえ思ったくらいだ。子供もなければ、ほかにきまった女もねえ。子分の数も八十人、あこぎなまねもしたことは、これっぽちもねえつもりだ。そのおれが、ここまで惚れこんだからには、なかなかかんたんにあきらめきれねえ。ほかに亭主があるとでもいうならそれまでだが、本願があるなどいわれちゃ、いよいよ気になる。それがどういう願いなのか、一つ聞かしてもらえねえか」

「さあ、それは……」

「女ひとりで無理なことでも、男の力を借れれば出来ることは、世の中にも少なくねえ。金なら千両箱の一つぐらいは融通もつく。人間なら、いまいった子分たちも顎で使える。顔だって、江戸じゃあかなり通っているつもりだ。その後だてがありさえすれば、たいていの望みならかなうだろうと、おれは思うが、そのほうが早道じゃねえのかなあ」

「お言葉はありがとうございますがその願の内容はうちあけられません。どんなことがあっても、それを一人でやりぬきたいのが、わたしの意地、どうかおあきらめ下さいな」

「そうかなあ」

権次もいくらかむっとしたように、杯の酒を一気にあおって、

「お前さん、ひょっとしたら、誰かの仇討をねらっているんじゃねえのか」

「仇討？　わたしが仇を！」

お妙はびっくりしたように顔をあげた。形のいい眉をぴくりとひそめて、

「わたしが、そんな女に見えますかねえ」

とごまかすように笑った。

「いや、いまふっと思ったんだが鉄火場へ出入りしていて

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com